

生物文化多様性の観点に基づく生物多様性理解のための実践研究
： 浮世絵と漢詩から考える生物多様性
Practical Research for Understanding Biodiversity
from the Perspective of Biocultural Diversity
： Biodiversity from Ukiyoe and traditional Chinese-style poem

倉田 薫子，河内 啓成，高芝 麻子，原口 健一

KURATA Kaoruko, KAWACHI Keisei, TAKASHIBA Asako, HARAGUCHI Ken-ichi

横浜国立大学教育学部・総合学術高等研究院

[要約]本研究は、生物文化多様性の考え方を踏まえ、文化の多様性から生物多様性保全に向けた行動変容を起こすための基礎的な研究である。文化多様性は2001年にUNESCO総会で可決された世界宣言以降、次第に重要性を増すとともに生物多様性とのかかわりを深め、2008年には生物多様性と文化多様性を橋渡しするようなUNESCO主催のワークショップが開催されている。本研究では生物と文化の多様性を関連付ける考え方にに基づき、日本の伝統的な文化である絵巻物や浮世絵、漢詩を教材として用いて作品を様々な角度から見ていくことで、自然環境や文明の発展と人々がどのように向き合っていたのかを知り、現代の生活や価値観を相対化することを目指した。その教材作成と高校生を対象とした実践を行い、生物多様性の保全を現代に孤立した課題として捉えるのではなく、人類が長く向き合ってきた普遍的な課題として捉え直すための試みを行った。

[キーワード]生物多様性理解，生物文化多様性，ESD，E-STEAM教育，浮世絵

1. はじめに

2001年にUNESCO総会で満場一致で可決された「文化的多様性に関する世界宣言」は、アメリカのデジタルメディア産業を巡る、自由貿易と文化の軋轢が背景にあった。しかし、UNESCOはこの宣言の中で、文化の多様性を貿易の問題にとどまらない、人類にとって普遍的な意義を持つ問題として捉え直しており、飯笹(2017)は「この「世界宣言」は、「文化の多様性」を「人類の共通の遺産」であり、交流、革新、創造の源泉として「人類にとって不可欠」なものとして、平和、人権、デモクラシー、持続可能な発展などに結びつくもの」としたと指摘している。

2005年10月にはUNESCOにおいて「文化的表現の多様性と保護及び促進に関する条約(通称「文化多様性条約」2007年3月発効)」が成立し、2023年までに約150か国が批准等をしている(2023年12月時点で日本は未批准)。2001年の時点でも持続可能な発展とともに論じられていた

文化的多様性は、2008年のUNESCOでの「Links between biological and cultural diversity」と題するワークショップの実施などを経て、生物多様性とのかかわりの中でも論じられるようになってきた。

文化の多様性がその土地ごとの気候や生態系を含む生活環境の中で生まれ、育まれてきたことについては疑問の余地はない。地域の文化の継承や文化多様性の保持のために、地域の生態系の保全の必要性が認識される、あるいはその地域の生活の営みの中で人の手が加わり生態系が保全されてきている／きていたことを知り、生態系保全に寄与する生活の在り方に気づくなど、リカレントを含む教育の中で生物多様性と文化多様性を関連させて捉えることはESD教育においても重要な手法となってきた。

生物文化多様性という視点のもたらす重要性の一つとして、生態系保全に関わる課題の中に文化や生活の在り方を含むことで、学習者が自身に

直接関係する課題として認識しやすくなる点が挙げられる。同時に、現代の課題を現代に孤立した、あるいは現代に特有の事情と捉えるのではなく、その地域の歴史の中に位置づけることができるという点も重要であろう。しかし歴史の中に位置づけようとしたとき、しばしば学習者は現代の生活実感や科学的認識をベースに過去を捉え、価値づけてしまいがちではないであろうか。

本研究及び実践は、近代までの絵画や詩歌などを用いてその時代ごとの生活実感を追体験することにより、生態系とともに生きる「私たち」の現代の営みを、当時の感覚に寄り添って歴史の中に位置づけていく試みとその考察である。

2. 実践の概要

本実践は横浜国立大学教育学部の公開講座として、高校一年生から三年生約 30 人を対象に、2023 年 7 月 28 日 13 時 30 分から 15 時 30 分の 2 時間にわたって実施した。絵画と漢文学の専門家が実践の中心を担い、生物学と木工の専門家が補助として加わった。

実践は以下の三点を軸に展開している。

- ① 絵巻物「江嶋縁起絵巻」から明示的でない自然環境の情報を読み取る活動
- ② 浮世絵「東海道五十三次」に描かれた神奈川県内(川崎宿から箱根)の旅をたどり、当時の街道沿いの環境の情報を読み取る活動
- ③ 乗り物や照明を描いた江戸時代から明治時代にかけての文献・浮世絵を比較し、文明開化と環境を読み取る活動

まず①の活動では岩本院本「江嶋縁起絵巻」第一巻の複写を用いた。「江嶋縁起絵巻」とは、平安時代に成立したとされる江島神社の来歴を記す絵巻物(現存最古のものは漢文の本文を持つ)であり、岩本院本は岩本院(江ノ島別当寺)に伝来する写本の一つで、室町時代の成立とされている(遊行寺宝物館. 2017)。本活動では本文は用いず、絵のみから情報を読み取らせた。

第一、二巻は人を食い殺す五頭竜と天から降臨した天女を中心に、江の島創成の伝説が語ら

れており、まず参加者はグループごとに「工事現場」と「怒られている竜」を絵の中から探しつつ、何が描かれているか話し合った。「工事現場」とは天女の命により夜叉鬼神たちが江の島を一晩で造成している場面であり、「怒られている竜」は天女に諭されて五頭竜が改心する場面である。一見、荒唐無稽な伝説のようであるが、夜叉鬼神が岩を運んできて島が生まれたとするのは岩がちな島を観察して想像されたことであろうし、五頭竜については氾濫を繰り返す川の象徴で天女の導きによって改心した竜はある程度治水に成功したことの象徴であるとの説もある(鈴木良明. 2019)。

このように、伝説やそれを描いた絵画が当時の人たちの自然環境への認識や実際に目にしていたものを反映している可能性があるという点を①において共有した。そのうえで、江戸時代の江の島を描く浮世絵をいくつか示し、ごつごつした岩肌や自然豊かな山が描かれていることを確認した。

続いて②でグループごとに 1 台ずつノートパソコンを用意し、国会図書館デジタルコレクションで歌川広重「東海道五拾三次」の川崎宿から箱根までを見て、気づいたことを話し合う活動をした。参加者の多くが、徒歩の旅であるための苦労や町の様子などに注目し、当時の旅行のリアルを反映しているのではないかという指摘が様々な形で提出された。そのうえで、背景に描かれる山を見ていくと、先に見た江の島の山々とは異なり、生えている樹木が乏しいことが見て取れることを確認した。そしてその理由として、現在の神奈川県下にあたる街道沿いの宿場町は人口が多く、薪などを採取するために森林の伐採が進んでいたことを説明した。自然から隔離された現代に対し、江戸時代は身近な自然が豊かにあったというイメージが抱かれがちであるが、当時のリアルを反映しているであろう浮世絵を見る限り、必ずしも豊かな生態系は維持されていなかったことが窺えることを確認することができた。

ここまで見た①と②の活動のように絵画の中に当時の人たちの生活実感に即した自然の在り方を見て取れることを踏まえ、③ではまず雪明かり・行

灯・ガス灯を描く浮世絵を時系列順に紹介した。真っ暗闇であるはずの灯りのともっていない夜の集落の絵が、雪明かりによって全体的にほのかな明度をもって描かれている(図1)のに対し、灯りが一つともることで明るい場所が生じるとともに暗い場所がより暗く描かれるようになり(図2)、ガス灯で辺りが明るく照らされる空間を描くと光と影のコントラストが拡大し、より一層明確になっていく(図3, 4)という点を確認した。

絵画から生活実感が読み取れるとすれば、人々は夜間に照明器具を手に入れたことによって明るさを獲得しただけでなく、その獲得によって夜の闇に対する理解も変質したと言えることになる。しかしこのような視覚情報無しで当時の人々の気持ちを想像するとき、現代の私たちは獲得し



図 1. 歌川広重「東海道五十三次之内蒲原」浮世絵 (東京都立図書館所蔵)



図 2. 歌川広重「名所江戸百景 猿わか町よるの景」浮世絵 (東京国立博物館デジタルアーカイブズ*)

*<https://webarchives.tnm.jp>



図 3. 小林清親「日本橋夜」浮世絵 (東京都立図書館所蔵)



図 4. 小林清親「イルミネーション」浮世絵 (東京国立博物館デジタルアーカイブズ*)

た明るさだけに意識が向かい、光と闇のコントラストの強化により世界全体の見え方が変質したかもしれないという点になかなか思いいたることができないのではないだろうか。文明との出会いによって生活そのものが変質したことを正しく理解するためには、現代の生活の中にある文明をなぞるだけでは不十分であり、絵画を用いることは、当時の人々の生活実感を伴う大きな世界認識の変質を気づかせるための示唆になりうるのである。

ガス灯の導入当時の人々の実感を知るためには漢詩など文献資料も役に立つ。明治期の漢詩の教本(漢詩を作る人たちの簡便な詩語集)にはしばしば「瓦斯灯」を詠むための詩語を集めた項目がある。そこには手本となるような作品も掲載されているが、例えば『近世詩作幼学便覧続』(1883)に掲載されている関根痴堂「瓦斯灯」詩ではガス灯が月を恥じ入らせると詠い(真成明月無顔色)、竜王などが持つとされる宝物である照夜珠にも譬えられている(別是人間照夜珠)。ここからも、ガス

灯は日常生活を便利にする当たり前の道具として導入されたわけではなく、竜王の秘宝や天空の月に比され、詩にも詠うべき非日常性を持った新しい価値の存在として認識されていることが窺えるということを参加者とともに確認した。

本実践では、機関車や蒸気船についても触れ、同様の事象が確認できることを体験してもらったが本報告では省略する。

3. 結果と考察

本取り組みは当時の生活実感に寄り添う視点を培うことによって「文明の中にあり自然と隔離された現代社会」に対置するものとしての「自然豊かな近世・近代」というステレオタイプから脱却し、環境の変化をそれぞれの時代の人々がどのように認識していたのかを知ることで、生態系とともに生きてきた生活史への理解を深め、現代の環境問題を自分たちの歴史の中に位置づける試みであったが、一定程度の目標は達成されたものと考えている。

活動により、浮世絵などの絵画に描かれる自然環境(伐採された山々や旅の様子)が、相応の信憑性を持ち、かつ当時の人たちの生活実感を反映していることは、事後レポートなどを確認する限り、参加者たちに確かに伝わっていた。また、ガス灯などに代表される科学技術の導入について考えるとき「その技術によってできるようになったこと」にのみ意識が向かいがちであるが、ガス灯などの導入により例えば江戸時代から伐採により荒れ果てた山々はどうなったのかという環境に向いた視座や、照明器具が世界の認識をどのように変えたかなどについての思考も、対話の中で深めることができていた参加者もいた。しかし三つの軸を個別のトピックスとして捉えている参加者もあり、全体像をより明確に関連付けて捉えるための工夫に課題が残った。

環境問題を現代にのみ懸念されている孤立した課題として捉え、単純に過去を善、現代を悪とみなしたり、現代の価値観で過去を推し量り、「現代に生まれてよかった」などと短絡に走ったりする中

で見いだされる環境問題解決への道筋は、時としては過激な環境活動を生み、あるいは環境問題を不毛・偽善と感じ、嫌悪や食傷といった感覚を生むことにもなりかねない。

生物文化多様性という視点から取り組む生態系保全は、文化という人々の過去の生態系保全のための膨大な実践例を積み上げたデータベースを利用する生態系保全に他ならない。そこには成功例もあれば失敗例もある。現代という一点に視点を置くことによる過激さや食傷を回避しつつ、人の営みを生態系との関わりに囚われない広い視野の中で捉えていくことは、歴史の中に自分たちの取り組むべき環境問題を位置づけ、相対的・客観的に認識することに繋がるのではないか。人類の過去に積み重ねてきた生態系との共存のデータベースの活用こそが、持続可能な社会の実現に向けた持続可能な取り組みを考えていくうえでの重要な手掛かりとなるはずである。

4. 参考文献

鈴木良明著(2019)有隣新書 84 江島詣 弁財天信仰の形. 有隣堂. 神奈川.

遊行寺宝物館編(2017)特別展 江島縁起. 遊行寺. 神奈川.

飯笹佐代子(2017)「文化多様性(cultural diversity)」をめぐる規範／文化の動向. インターカルチュラル 15:34-39.

文部科学省ウェブサイト(2010)文化的表現の多様性の保護及び促進に関する条約の締結に向けた取り組みについて(建議).

<https://www.mext.go.jp/unesco/002/004/1291784.htm>

UNESCO(2008)Links between biological and cultural diversity: report of the International Workshop.

<https://unesdoc.unesco.org/search/N-EXPLORE-b5a40a23-bf98-40dd-80ac-5a06706d9764>

本研究は JSPS 科研費 23K02360 の助成を受けたものです。